

蜜柑のぬくもり

——芥川龍之介の『蜜柑』について——

裴

崢

(北海道大学大学院教育学研究科修士課程)

1 問題提起

外国語の学習は、単なる「語学」の勉強だけではなく、人間学の立場において、あるいは社会科学の角度から、人間理解に繋がるような、多面的な「外国語学」として、取り込まれなければならない。外国語文学作品読解の授業は、まさにその重要な一端を担うものだと考える。外国語文学作品読解の授業によって、学生達に文学そのものへの感動を持たせると同時に、その国の民族性や社会の制度や風土などを、自国の立場から正確に把握できるような力を培ってもらわなければならないからである。そのためには、教師は外国語について、正確な文学知識と豊富な語彙が必要である上に、教材についての適切な背景知識と指導方法も要求される。

1982年、私は北京外国語学院日本語学部大学院を修了してから、ずっと日本語の教師として勤めてきた。日本文学作品読解（以下は読解と略す）の授業において、一般的に中国人教師は（私自身も含めて）、ただ表記されている日本語の「単語」を、正しく説明しようと、そればかり気を配ることに追われているのが実情である。辞書上の語義を完全に理解し、その上で学生に教えて理解させるということ自体、かなり難しいことである。おのずから学生に作者の表現しているものすべてを汲み取らせるのは、一層困難と言える。結局、教師の「語彙力」が乏しかったり、ピッタリと文意に即した訳語を見い出せなかったり、さらに作品の雰囲気や状況の解釈、作者自身のことや世相等についての説明に欠けたりするため、教材になる作品そのものの味も匂いも半減し、学生が作者の心情に迫り、共感を分かち合うところまで至らないうちに、授業が終わってしまうことが多い。

こんな状態に陥るのは、おそらく教師の言語上の障壁がある外に、日本の社会と文化的背景についての知識、及び日本文学を鑑賞する方法が、まだ十分身につけていないことに由来する。一方、読解という授業が、真に文学教育として扱われていないことにも起因しているであろう。実際に、読解は言葉を説明し、両国語を対訳するだけの作業に限らず、異国の文学表現を通して、未知の世界に対する理解と認識を高める授業であり、また言葉を通して、さまざまな人生を体験し、文学に面白さを発見するような一般的な文学授業でもある。一言でまとめれば、三枝康高が強調するように、「文学を文学として読む」ことである（『文学作品の読み方教育論』）。外国文学にこそ、それなりに独特なイメージがあり、感動させる力があるのだから、それらのものも味わえないのなら、読解という授業の意味がなくなってしまうのではなかろうか。

従って、読解の授業において、教師としては、学生のために、言語上の困難を取り除きながら、学生に想像力をかきたてて、作品のイメージを豊かに創り上げ、さらにその主題を深く把握させるように心がけなければならない。これこそ読解という授業の本当の目的であり、また本稿で検討したい課題ともなる。

なお、中国における読解の現状を改善しようとするためには、第一に、具体的な作品をめぐって、指導プランを作成することが重要と思う。なぜならば、これがあってこそ、はじめてはつきりとした目標を持って、プランの合理性と有効性を検証し、重ねて手を加え、よりよく吟味することができるのではないかと考えるからである。

2 教材の選定

残念なことに、今まで中国人教師の作った読解の具体的な授業案が、まだ一つも見つからない。ここでは取りあえず芥川龍之介の短篇『蜜柑』を素材にして、授業の指導プランを自分なりに試みたい。

スケールの大きく、ストーリーの複雑な中国小説に見慣れてきた中国人にとっては、日本小説は狭苦しく、詰らないと感じがちである。にもかかわらず、日本小説はそれ自身の美を持っている筈である。読者に強烈な、迫力のある刺激を与えるには物足りないかも知れないが、淡々とした静かな感動を、穏かな中に味わい尽せぬほどの深い情緒を漂わせていて、素晴らしい。芥川龍之介の『蜜柑』は、まさにこのような典型的な日本小説の一つと言える。一見華麗ではなく、淡泊そのものだが、作者の念入りに練り上げた細工物のように、十分玩味できる作品なので、今回の指導プランを作るに当たって、『蜜柑』は、まさしく好個の材料ではなからうか。

3 指導プランの方法

今までのやり方から見れば、作品をめぐって、言葉の説明などが重んじられてきたように見える。作者はなぜこのように描くのか、読者はどう鑑賞したらいいのか、中国の作品と引き比べたらどんな差異があるのかについて、あまり問われていない。しかし、文学作品を読む時、主題は、普通作者、作品、そして読者の三者の関係から把握すべきものである。すなわち、作品を中心にすえる一方、作者の立場から作品の生まれる過程を説明し、併せて読者として、その作品を鑑賞し、評価することにも、配慮しなければならない。こうした点を無視しては、真に読解、ならびに日本文学教育の有効性を高めることはできないに違いない。すると、このような観点を踏まえ、具体的には以下のような三つの段階に分けて授業の進め方を考えたい。

第1段階は、作者の生い立ち、作品の時代背景の説明を通して、学生に作中人物の性格、心情、人間関係を認識するための糸口を与える、いわば導入の段階である。

第2段階はさらに二つの小段階にわかれる。第1段階で得た予備知識を頭におきながら、作品を読み、そこに現われた語彙の意味や働きの説明を通して、学生に作品のストーリーへのイメージを持たせる知覚の段階と、登場人物の複雑な内面的世界を掴ませる、いわば分析と理解の段階である。

文学作品をどう読むべきかに関して、桑原武夫が『文学入門』において、次のように述べたことがある。

「今まで日本では、作品が問題にされるときは、いつも作家の創作面に過度に重点がおかれ、読者の享受面がそまつに軽んぜられる傾向が強かった。……そこでは、もっぱら作者の意図とその作品における成功度の探求に力がそそがれるが、社会人の代表として、その享受を基盤として研究をすすめること、たとえば一個の小説を読むことが、読者にどのような喜びと悲しみを与え、どのように経験を形成するか、を示すといったようなことがほとんどなかった」。

まぎれもなく、この問題は前に触れたように、中国にも存在する。が、氏の述べた通り、文学は言葉の芸術である以上、文学教育においては、そこに潜んでいる美と真実を発見し、追求すべきである。それゆえに第三段階においては、第1、第2段階で作者の創作面と作品のイメージなどを理解した上で、語彙表現から作品主題への理解に繋げるための問題追求の過程を設定し、さらに、類似する中国の作品と比べ合わせて読むことを通して、学生なりにその作品を十分味わい、共感を作者の意に迫りながら深めさせ、そして、日本文学に接した喜びを体験させる味読の段階が必要である。

本稿ではこの方法で『蜜柑』の指導プランを作ってみる。なお作業中、教師の立場に立ちながら、心の中にもうひとりの自分、学生の立場に置いた自分をつねに意識しつつ、取りくむ姿勢を忘れてはいけないと考える。

4 苦悩と希求の生涯

芥川龍之介は、中国人のよく知られている日本作家の1人に挙げることができる。かれの『羅生門』、『鼻』が60年ほど前から、魯迅によって中国語に訳されたこと、かれの名に基づいて、日本の文壇では文学賞まで設立されたこと、かれが若い内に自ら才能にあふれる命を絶ったこと等によって、有名になったようである。しかし、かれが芸術至上主義の道に挫折し、自殺してしまったのだと知っていても、かれの不遇な出生と苦しい精神過程について、よく理解されておらず、またかれが現実社会に対する苦悩と批判を訴えるため、歴史小説の中にその題材を求めていたと知っていても、かれの精神的に明るい一面を窺かせている現実的な作品、いわば『蜜柑』のような作品に、あまり親しんでいないのではなかろうかと思われる。

芥川龍之介は、父42歳、母33歳のいわゆる大厄の子として、1892年3月1日東京に生まれ、本名は新原龍之介といい、父親は牛乳業をした。生後9カ月頃から母親が発狂してしまったため、やがてその実家芥川家の養子になった。その後生母は10年間も生きつづけていたものの、龍之介には、その顔の「少しも生氣のない灰色をしている」(『点鬼簿』、以下略)母に一度も「母らしい親しみを感じたことはなく、一度かれの養母とわざわざ母に「挨拶に行ったら、いきなり頭を長煙管で打たれた」というような辛い思い出しかないらしい。自分は母の乳を吸ったことのない子だ、ということにもひどくこだわっていた。かれにとっては、母の発狂、養子生活での不遇は、かれの精神を苦しめ、性格をひねくれさせ、大人になってからも、その心理的な重荷は、軽くなるどころか、ますますかれの心にのしかかってきたようである。

養父は東京府で土木科長を勤めて、定年退職した後、余裕のない年金生活をしていた。とはいえ、芥川家は代々お奥坊主として幕府に仕えていた由緒ある旧家であるので、龍之介は、少年時代から家庭の文人的な匂いに薫染し、幸田露伴、泉鏡花、樋口一葉、徳富蘆花などの作品はもちろん、イブセン、ドストエフスキイ、トルストイ、モオパッサン、ストリンドベリなどの欧米文学も読み漁っていた。かれの目には、読書を通して開かれた世の中、人間世界は、かれ自身の生きていた現実よりずっと魅力的に映じていたらしい。もっとも、養父母は子供がいないため、やがてかれに芥川家を嗣がせるようにし、終生独身で実家に留った伯母も、かれを極めて可愛がったのは幸いなことだったが、敏感な龍之介には、やはりわが家にいるような気ままな振舞いが許されず、常に周囲の動きに気兼ねせざるを得なかったと想像がつく。孤独で、普通の人に比べてあまりにも早く身の上の不幸を知らされた龍之介は、自然にまわりの書物に無類の情熱と知識欲を傾けるようになり、そしてそこから人生の悲喜と人間の表裏を理解すれば

するほど、ますますかれは本の中になにかを求めようとしたくなる一方であった。

言うまでもなく、学校においては、龍之介はいつも優等生であり、特に漢文の力がずばぬけて、早くから文学的な才能を発揮していた。1913年、東京一高を経た龍之介は、推せん入学で東京大学英文科に進学した。在学中に菊池寛、久米正雄らと同人雑誌第3次「新思潮」、続いて、第4次「新思潮」を発刊した。ちょうどこの前後に、かれの生活に新しい波紋が起こった。

龍之介は、初恋を体験した。かれの実家新原家の知り合いの家の娘で、頭のいい才媛と。この恋に生き甲斐でも見出したかのように、かれは熱烈に恋した。しかし、かれをもっとも可愛がっていた伯母の束縛によって、それは結局実らない恋に終わった。

「イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出来ない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒す事は出来ない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない……」

1915年3月9日、龍之介はかれの友人恒藤あての書簡に、このような深い感傷をもらった。その思わぬ精神的打撃は、かれをなんと手ひどく打ちのめしてしまったことだろう。こうして龍之介は、いっそう人間と人間のいがみあう醜さ、利己主義的存在である人間に嫌悪と懐疑の思いを秘め、「人生は一行のポオドレエルにも若かぬ」というかれの文学的信条に、ますます身を捧げるように走っていった。

1915年、龍之介は『羅生門』を発表した。同年かれは、夏目漱石を師と仰ぎ、その門下となった。翌年大学卒業前、龍之介は漱石の激賞を受けた『鼻』の発表によって、文壇進出への着実な一歩を踏み出した。やがて卒業後、海軍機関学校嘱託講師、大阪毎日新聞社などを経て、本格的な作家生活を始めた。かれは『孤独地獄』、『芋粥』、『或日の大石内蔵助』、『戯作三昧』、『地獄変』、『枯野抄』、『杜子春』、『舞踊会』など、多くの名作を書き綴り、旺盛な創作力を見せた。その間、1918年、かれは中学時代の親友山本誉司の姪、塚本文子と結婚し、まもなく父親になった。1921年、かれはまた大阪毎日新聞海外視察員として、中国に特派され、帰国後『上海遊記』を発表した。

この頃における龍之介は、かれ個人としての生活は一応安定していて、創作も着々と進んでいたと見えよう。しかし、1916年、かれはずっと敬慕の情を抱いていた漱石を失ってしまったのである。やがて日本に米騒動、社会主義や労働運動などが起こった。龍之介も他の文学者と同じように、それによって在来の社会観、人生観、ひいては芸術観の変換が迫られる時代の渦に巻き込まれていた。そもそもかれ自身をそれまでの芸術上、思想上の行き詰まりに悩みはじめ、新しい進路を試みようとしていた。『蜜柑』は、1919年に書き出されたのであるが、「現代生活を正面から押して行き、それにと角ある程度の成功を収め」（『吉田精一著作集』1）た、と吉田精一は、龍之介のこの種の作品を肯定した後、さらに『蜜柑』の創作過程とできぐあいについて、次のように詳しく評している。

「『蜜柑』は評判がよかった。……龍之介自身の直接経験を題材にしたもので、その事実遭遇した時、彼は菊池寛にも直ぐこれを伝えたほど、（菊池寛、『文芸作品の内容的価値』）、深い感動にうたれたのである。片々たる小篇だが、粗野な小娘の野性の中にある純情が、いくつかの蜜柑に象徴されて、蕭索たる、又陰惨たる風景の中に乱落する風景は美しい。」

龍之介は、昔の物語りを通して、現代の何ものかを探求するという従来の手法を変え、直接身辺の人びとの営みを観察した結果、そこで体験した感動を作品の中に生かしていた。龍之介は人間嫌悪に悶えながらも、結局確かに現実社会に生きていて、周囲の美しいものに目を止め

ていたのである。だが、すでに『蜜柑』の結末にも明示されているように、そのような感動は、龍之介にはもともと少ない上、極くわずかな間しか続かなかったのである。龍之介の心底に、依然厭世主義と懐疑主義が深く折り込まれていた。しかも、経済恐慌、関東大震災、プロレタリア文学運動などがつぎつぎと起こった激しい時代の変化によって、ひとしお程度が強まっていた。『侏儒の言葉』、『蜃気楼』、『河童』と、かれは、そのようなかれの内面だけの精神的な作品を書いて、人生派文学への憧憬と、自分自身の芸術至上主義についての自信喪失との葛藤を示していた。

1927年6月24日未明、社会と文芸の将来に対する「ぼんやりした不安」（『或阿呆の一生』）を抱き、「胃腸は悪いし、神経衰弱は強いし、痔は起るし」（1926年1月の手紙）と訴えていた芥川龍之介は、田端の自宅において、ヴェロナールの致死量を仰いで、自ら生涯を閉じた。わずか36年の敏感多傷な生涯を。

龍之介の暗い生立ちを裏付けるように、かれの作品も暗くて淋しいものが多かった。しかしどの作品にも、冷静に人間の様々な心理を見据え、それをつとめて深く解剖しようとする作者の真剣な目と真摯な姿が見られる、と多くの文学批評家が論じている。吉田精一が断定したように、「彼は芸術家として『態度の人』であった。」（出典同前）かれは「態度の人」であったからこそ、社会や人生の醜い面を見過ぎるほど見つめていたと同時に、かれはまた未来に対して切ない希望と追求を持たないわけにはいかなかった、と私は考える。本来、人間には希望があるからこそ、苦悩が生じてくるのではなからうか。龍之介も例外ではなかったに違いない。磯田光一の言葉を借りよう。

「龍之介が単に人生の醜悪を発見したというなら、今日われわれは彼をとり立てて論ずる必要はないであろう。醜悪の発見の背景には、美德への飽くことない希求があった。」（『芥川龍之介全集』・2）

その通りである。龍之介の人生及び文学には、決して闇の世界ばかりではなく、歴史小説として光明への希望を暗示した作品の外に、作者自身の現実の感動的体験によって、綴られた作品もあった。それらの作品は少ないことは少ないのだが、龍之介を全面的に理解するには、欠くべからざる役目を果している。『蜜柑』は、それらの作品を代表するような、「非常に微妙な、鮮やかな効果を持っている」「好個の短篇である。」（堀辰雄『現代日本文学大系』・43）

5 『蜜柑』のストーリー

「或る曇った冬の日暮、言いようもない「疲労と倦怠」につきまとわれた「私」は、横須賀発上り2等客車に乗って、どこかへ行く。車内にも、プラットフォームにも人影がなく、ただ一匹の小犬が、檻に入れられたまま、悲しそうに吠え立てている。

やがて発車した。その間際に、「いかにも田舎者らしい娘」が車内に飛び込み、「私」の前に坐った。その「下品な顔だち」、不潔な服装、及び二等と三等との切符の分別さえつかない「愚鈍」さを、「私」は「好まなく」て、「不快」で、「腹立しかった」。この気まずい思いばかりさせられる小娘の存在を追い払おうとするかのように、「私」は夕刊を広げてみた。しかし、そこに埋まっているあらゆる記事は、また詰らなくて、「私」をやりきれない憂いから救い出してくれそうなきごととは、一つも見当らない。「隧道の中の汽車」と、下品な小娘も、卑俗な現実ばかりで「持ち切っていた」夕刊も、なにもかかものが「不可解な、下等な、屈辱な人生の象徴」としか、「私」の目に映らなかった。「私」は「死んだように目をつぶって」、ただ汽車に揺られて

いた。

「汽車が今将に隧道の口へさしかかろうとしている」暮色の時なのに、いつの間にか、小娘は「私」の隣へ来て、「重い硝子戸」を懸命に開けようとしていた。「その悪戦苦闘」を、単なる小娘の「気まぐれ」の行動に過ぎない、と思った「私」は、それがいつまでも成功しないように、と「険しい感情を蓄えながら」、冷たく眺めていた。が、硝子戸はぱたりと下ろされた。「私」はたちまち「煙を満面に浴びせられ」、「息もつけない程咳きこまれてしまった」。こんなに「私」を苦しめているのに、まったく無頓着で、窓の外へ首を伸ばしたまま、「じっと汽車の進む方向を見やっている」小娘を、「私」は「頭ごなしに叱りつけ」たかった。

しかし汽車はまもなくトンネルをすべりぬけて、「或る貧しい町はずれの踏切りに通りかかった。藁屋根も瓦屋根も「見すばらし」く、風景は「蕭索」そのものだった。その上、踏切りの柵の向うに、「目白押しに並んで立っている」「頬の赤い」3人の男の子も、「揃って背が低い、陰惨たる風物と同じような色の衣服を着ていた」。彼らの迸らせた喊声も、「意味の分らない」ように、「私」に聞こえた。が、その瞬間、「例の娘が、あの霜焼けの手をつとのぼして、勢いよく左右に振ったかと思うと、たちまち心を隔らすばかり暖かな日の色に染っている蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑んだ」。

恐らく生活のために、これから家を出て、どこかへ奉公に行かなければならぬこの小娘は、暗くて寒いのに、わざわざ踏切りまでお別れに来た弟たちを慰め、蜜柑を窓から投げたのだから、と「私」には一瞬のうちに、すべてがのみこめた。

汽車は止まることなく前へ進んでいる。小娘はあいかわらず汚なくて、愚鈍である。しかし、「私」ははじめて、先の名状しがたい疲労と退屈な人生とを、わずかな間「忘れる事ができた」。

このように、『蜜柑』においては、謎を暗示する伏線みたいなものもなければ、読者を引きつける紆余曲折した筋もない。しかし、私たちは、実際に、『蜜柑』を読む時、主人公「私」のゆううつな気持ちを察しながら、一緒に汽車に乗り、小娘の訳の分からない行動に憤慨させられる「私」に同情しながら、ともに時間を過し、そして最後に小娘の投げた「暖かい日の色に染まった「幾顆の蜜柑」を見て、胸が熱くなった「私」を、喜びながら、同時に一種の感銘を覚えることができるのではなからうか。

しからは、作者は、どうしてこのような効果を達成し得たのだろうか。恐らく次のようなことが考えられる。まず構文上では、作者が、直接に読者に訴えるように「私」という第一人称で書く手法を用いたこと。作品にリズム感を持たせるために、汽車の進行に伴って、巧みに筋を展開するように仕組んだこと。そして作中の雰囲気をもり上げるべく、表現に丹念に磨きをかけ、似たような言いまわしを重ねて使ったこと。この最後の点について、例を上げて説明しよう。

たとえば「私」自身の心理描写の場合、

ぼんやり、疲労、倦怠、懶い、憂鬱、死んだように、

小娘に対する「私」の心持ちを描く場合、

好まない、不快、腹立しい、忘れたい、険しい、冷酷、

などを使っているのである。これらの似通った言葉を、何度も繰り返し読んでみると、作中の「私」の暗たんたる、やる瀬ない心情が、自然に読者に伝わってきて、「私」は何故こんな心境

に纏りつかれているのかということについて、興味と緊張感を促される。

「私」のいらいらした気持ちをよりよく表現するため、作者は助詞のところにも気を配っていると考えられる。『蜜柑』の中において、「さえ」という副助詞が、4回も現われている。

- 1 ……今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って……（傍点筆者）
- 2 ……夕刊を出して見ようと云う元気さえ起らなかった。
- 3 ……二等と三等との区別さえも弁えない……
- 4 ……手巾を顔に当てる暇さえなく、……

「さえ」と似たような、程度の強いものをあげて、他を類推させる意を表す副助詞として、外に「も」とか「すら」とかがあるのに、作者はまったく同一の副助詞を何回も続けて用いて、しつこくなることを顧みずに、「さえ」ばかりを使った。これは決して作者の気まぐれや言葉に対する偏愛などによる結果ではない。同じ意味だが、「さえ」より、「も」と「すら」はいずれも語感が弱いのである。「さえ」の連続使用によって、くどいどころか、「私」の周囲のすべてに対するやり切れない苛立ちが、印象強く、手に取るように浮き彫りにされた。

なお、上に上げた語彙にせよ、副助詞にせよ、その用法は、どれもそのまま中国語に直訳できる。ところが、次のようなセンテンスについては、日本語では使役形だが、中国語に訳せば、必ずしも使役形にならないこともある。例えば、

- 1 ……両頬を気持の悪い程赤く火照らせた、如何にも田舎者らしい娘だった。

訳 那是個道地的郷下姑娘，紅得刺目的双頬上……（『芥川龍之介小説選』，文潔若の訳による。以下略）（直訳「赤くて…目を刺すような頬」）

- 2 凄まじい音をはためかせて、……

訳 發出凄厲的声响……（直訳「すさまじい音を出して」）

- 3 ……風に银杏返しの鬢の毛を戦がせながら……

訳 ……風吹拂她那挽着银杏髻的鬢髮……（直訳「風が…鬢の毛を吹いて」）

- 4 いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊声を一生懸命に迸らせた。

訳 扯起小々の喉嚨拼命尖声喊着，听不懂喊的是什麼意思。（直訳「喉を使って…叫んでいる」）

当然、このような中日の言語における表現上の違いを別に取り上げなくても、作品に対する理解の差支えにはならないが、日本語を習う学生を対象にするのだから、やはり作品より、先に「日本語」としての一般的な知識を植えつけることを、丁寧にしておく必要がある。すなわちできるだけ学生に、『蜜柑』のストーリーや主題を掴むための根拠を、まず作品中の言葉、あるいは表現の特徴に求めるようにさせたい。

6 蜜柑のぬくもり

3、4章でのように芥川龍之介の生立ち、文学行程及び『蜜柑』のイメージに触れることによって、学生には『蜜柑』は作者自身の体験であり、病弱な体と過敏な神経の持ち主——主人公の「私」——には、常に自分の不幸な出生にまつわる暗い人生観と、日ごろ虚無的な厭世主義、懐疑主義に煩悶していたのだが、ある日突然ある貧しい小娘の投げた蜜柑を見て、大変感動した、ということがわかってくるだろう。作者の胸中に、一体どんな感動が込み上げたのか、『蜜柑』を読んで、読者にははたしてどのような主題が与えられたのかについて、ここで作中の筋と表現を辿りながら、問答の形式を用いて主題の解明に迫り、その上学生が中学校で習っ

たはずの魯迅の短篇小説『小さなできごと』との比較を加え、作者の人間像を見出ししたい。

○脚本形式の問答案

問1 ぼんやり発車を待っている「私」について、どんなことを感ずるか。

〔教師の説明〕「私」の身分も汽車に乗る目的も降りる場所も、一切説明されていない。「私」が「ぼんやり発車の笛を待っていた」のは、まるで「私」が自分の人生の終りを漠然と待つばかりに、なんの能動性も人生目的もなく、ただ生きつづけているのを示しているかのように思える。

問2 どうしてこのようにイメージ付けられてしまったのか。発車前の描写からそう受け取られたのだろうか。

〔教師の説明〕つきなみの書き方なら、風景なり駅の建物なりを書くのが普通であり、また実際多くのもがあったかも知れないのに、作者は特徴のあるものとして、単なる駅の空間的な広がりとし悲しそうな小犬を、書くことを通して、「私」のわびしい気分を簡潔に浮き出させた。そこは作者の感性による着眼である。何を感じ、どこまで深く感じたかを読者に共鳴させるような形で表現したのである。作者のさりげない描き方だが、読者に主人公の気持ちを分かち合わせる一つの技法に見えよう。その描写によって、読者も実に乗客の一人として、「私」と同じ客車に乗せられているような心地になってしまったのだろう。

問3 ようやく発車の笛が鳴って、「私」もやや落ち着いたのに、そこでだしぬけに誰かがこの客車に飛び込んできて、また「私」はその不意の客にどんな感じを受けたのだろうか。

〔教師の説明〕いかにも田舎っぽくて、見すばらしい小娘が乗ってき、「私」の前の席に坐った。疲労や倦怠に悩まされている「私」には、自分の出生、ゆたかとはいえない家庭への嫌悪によって、また最初から田舎者や下層のものに対して、神経質的な嫌悪感があった。「私」は高い教養を備えている傲慢なインテリであり、人生や人間社会について知り過ぎるほどよく知っているつもりである。それにひきかえて、小娘は田舎者で、教養も身分もなく、無知で平凡な存在に過ぎない。おまけに2等と3等との切符の区別さえ分からないなんて。とにかくこの小娘に代表されている人間の低劣さに、「私」は心の底から軽侮と嘲笑を持っていた。客車には乗客が二人しかいないほど、ゆったりとしている筈なのに、作者の描写に引き込まれて、緊張した雰囲気包まれながら、そこに乗り合わせた読者は、これからどんなことが展開されていくだろうか、と物語りの進行に苛立ちが募ってくるほどに関心を持つようになる。

問4 さて「私」は小娘のことをさっそく車掌につげ口をし、小娘はやがて追い出されてしまうのではなからうか。

〔教師の説明〕繰り返しになるが、倦怠感と人間嫌悪感に纏いつかれていた「私」には、どうしてそんな積極的な行為があり得ようか。「私」はその小娘を忘れさえすることができればと思って、新聞を読むことにすがる。講和問題、新婦新郎、瀆職事件、死亡広告……、それらの記事は、「私」のゆううつを柔らげるところか、人生を不可解な、下等な、退屈なものとしか連想させなかった。ここで言及したいのは、新聞も小犬の役割りと同じように、物語りの社会背景を示す道具の一つとして登場させたものだということである。作者は新聞を借りて、実に親切に、無駄なく、作品をよく理解するための情報を読者に与えている。

問5 いよいよ蜜柑が登場してくる。普通蜜柑は黄色いとか、橙々色とかに見えるが、龍之介の筆になる蜜柑は「心を躍らすばかり暖かな日の色に染まってい」る、と書かれている。こ

れについて、ある中国人の日本語学者が「暖かな日に照らされて……」と訳しているが、本当に夕日がさしていたのだろうか。（「給温煦的陽光映照成令人喜愛的金色……」）註

【教師の説明】「蜜柑」をずっと読んできて、「曇った冬の日暮」、「暮色の中」、「闇を吹く風」、「懶げに暮色を揺すっていた」、「この曇天に」、などといった言葉の後に、太陽が出る筈はないし、日を連想させる手がかりもないのだ。

問6 みんなの調べたところで、日はさしていないと分かった。にもかかわらず、ここで「日に照らされて」と訳したのは、訳者はただよく読んでいなかったからだろうか。どうもそうではないように私には思うのだが。

【教師の説明】曇った冬の夕暮れという景色は、「疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた」「その時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった」。新聞も「索漠とした記事」に満ちていて、なおさら「私」に絶望的な思いをさせ、だから「死んだように眼をつぶって」しまった。その中に、まるで灰色の暗い精神に、パッと暖かい日光がさしてきたように、「私」は小娘の行為を見て感じたわけであり、「私の心の上には、切ない程はっきりと、この光景が焼きつけられた」と書いたのである。そういうことから見て、作者の「暖かな日の色」は、心の中に照らす日光の色になる、という思いになる。訳者はそう思って訳したのかなあ。しかし、そうだったとしても、「日に照らされた…金色」と訳すると、「私」の心感じた暖かな蜜柑色は、まったく「私」の感動とは無関係で、ただ日の色に染まった客観的な描写になってしまうのではなかろうか。実際、「私」の心の上に焼きつけられたのは、小娘の行為の単なる視覚的な反映ではなく、その行為を見たことによって、「私」の暗い気持ちの底に潜んでいる別のものを喚起されたのである。

「私」は人生を全面的に否定する存在であるかのように書かれてきたが、一方「私」の内心には美しい人生や親しい人間関係に対して深い憧れも持っていた、と描き出されている。小娘が弟たちへ蜜柑を投げる行為のうちに、温かいいつくしみの情がまさに「暖かな日の色に染まっている蜜柑」のごとく、「私」の心には閃めくことができたからである。その純真、無私の血の繋がりの愛を見て、「思わず息を呑んだ」「私」の姿には、またどうしてかつて破恋の打撃を受けて、「イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない」、と悲しく嘆いた作者自身の姿を重ねて見るができないであろうか。去る時の傷が深ければ深いほど、今の感動が大きいのではなかろうか。

作者は、蜜柑を忘れたかと思われるもどかしさの最中に、すなわちクライマックスを迎えた時、蜜柑を鮮やかに登場させた。それは見事に成功したと思う。黄色や、橙々色ではなく、作者は「暖かな日の色」という抽象的な色で蜜柑を形容した。それは繰り返すように、目に見えたままの色彩ではなく、心に伝わってくるぬくもりのような感覚である。その描写は、それまでの人生に対する「私」の冷たい感じの叙述と照らし合わせてみると、なおさら素晴らしく効果が目立つ、と考えられる。「私」——つまり作者龍之介——の「美德への飽くことない希求が」、結局「心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑」に託されて、輝いて現われた。私は、これが、この作品の主題を示していると同時に、龍之介の内心の明るい一面をも裏づけている、と思う。

註

「蜜柑」は、1981年、中国における比較的権威のある日本語学者、文潔若によって中国語に翻訳された。「芥

川龍之介小説選」(人民文学出版社)所収。

○ 魯迅の「小さなできごと」との比較

しかし、こういう感動は、「私」にはわずかな間しか持続しなかった。それは作者たる龍之介の人生観における限界でもあった。菊地弘が『蜜柑』を論じた文の中で、次のように芥川を批評した。

「芥川がそういう温情とか人間味をありがたがったり、感動するような一種の美しい行為と感じたことであるが、……真に作者の魂を顛動するほどのものに高揚したのかとなると、必ずしもそうとはいえないのである。」(『国文学』、1969年4月号)

龍之介は、蜜柑のぬくもりで象徴された姉弟の別れの哀切感、それまでの小娘の姿からは思いもよらぬ人間の中にある純粋な愛情に気づかされ、強い衝撃を与えられたにもかかわらず、それは龍之介の憂いに打ち勝つほどの力強さはなかった。龍之介は、作中の「私」と同じように、あくまでもそこにじっと坐ったまま、小娘を眺め、社会を眺めていただけであった。

ところが、『蜜柑』を発表した翌年、1920年7月、中国では偶然に魯迅も自分の体験を素材にして、『小さなできごと』という短篇を発表した。二つの作品はいずれも「私」という第一人称で書いた上、筋の展開も似通うところが多い一方、それぞれまったく違う結末を持っている。まず『小さなできごと』を要約してみよう。

「私」が田舎から北京に来て六年になる。世間の流れはただ「私」の癩癧を募らせ、日まじに「私」を人間不信に陥らせたただけであった。が、ある日、「私」は人力車に乗って出かける。途中、いきなり歩道から飛び出した老婆が車の前に倒れた。うわ着がかじ棒に引っかかったせいで。車夫は「私」をおいたまま、老婆を助けおこしてから、ためらわずに老婆に肩を貸しながら、派出所に歩いていった。「私」は最初のうち車夫をおせっかいな奴だと思っていたが、そのうちに、車夫のうしろ姿が「私」にとって一種の威圧めいたものに変ってくるように感じられ、そして、この出来事はいまでも忘れられず、「私」に恥を教え、勇気と希望を与えてくれている。

このように、両作品の「私」は、みな現実に不満と懐疑を持っている。『蜜』の「私」より、『小』の「私」はもっと憤懣が激しかった。しかし、小さな出来事にあってから、二人とも人生の美しい感動を受けたものの、『蜜』の「私」のは一時的な感激で終わったのに対し、『小』の「私」の感動はそのあともずっと保たれており、「私」を反省させ、そして未来に対する希望と奮起を促す勇気とを、与えられたのである。

いわば、魯迅も苦悶があったが、にもかかわらず希望を懸命に見つけだそうと努力していた。ところが、龍之介はそこまで行かなかったのである。時代は勿論よくなかったが、かれにはひっきょう現実の中で、絶望を語るに足だけのぜいたくな境遇があったのではなかるうか。それでは社会から隔てられた状態で、芸術に命をかけようと必死になろうとしても、救われないに決まっている。魯迅が指摘しているように、

「彼の作品にとられている主題で最も多いものは希望が達せられた後の不安か、あるいはいままさに不安におののいているときの心情である。」(『魯迅全集』・12)

それは正に龍之介自身の心境である。芥川龍之介は、到頭その不安の悶えに命を奪われてしまった。恐らくかれの表に現われている暗くて冷静な面があまりにも多かったからだろうが、『蜜柑』のような数少ないかれの明るい一面を示す作品、わけてもかれの並々なぬ技法によって、書き出された蜜柑のぬくもりが、異様な鮮やかさを浴びて、われわれを引き付けるのでは

なかろうか。

この指導プランは、あくまでも頭の中で想像しただけのものであり、まだ実行してきていない。これを用いて果して思う通りに授業を進めていけるかどうかについては、これから実践を重ねて、検討したい。

参 考 文 献

- 1 『文芸教育辞典』西郷竹彦編集 明治図書 季刊 文芸教育 21 特大号
- 2 『文学入門』桑原武夫 岩波新書 1988 年版
- 3 『現代作家論全集』8 中村真一郎著 五月書房版 1958 年版
- 4 『国文学』17・20・22 巻 学燈社
- 5 『吉田精一著作集』第 1・2 巻 桜楓社 1979 年版
- 6 『芥川龍之介小説選』文潔若等訳 人民文学出版社 1981 年版
- 7 『現代日本文学大系』43 筑摩書房 1968 年版
- 8 『魯迅全集』1・12 人民文学出版社 1981 年版
- 9 『文学作品の読み方教育論』鈴木秀一等著 明治図書 1986 年版
- 10 『芥川龍之介全集』筑摩書房 1986 年版